

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名:井坪 信 二村 俊

所属:長野県飯山養護学校

記録日:2016年2月12日

キーワード: 自閉症 PECS タブレットによる表出

【対象児の情報】

・学年 中学2年生 女子

・障害名 知的障害を伴う自閉症

・障害と困難の内容

発語はない。自己刺激的な行動が多く、要求はクレーンなどによるものがほとんど。(給食場面では写真を指さす) 制止を振り切って行動することがある。気持ちや要求が通じない時は頭をたたく、机にぶつけるなどの自傷行為がある。(太田 Stage I -2~3と思われる)

(活動目的)

・当初のねらい

周囲とのコミュニケーションが困難な対象児に、コミュニケーションの成立条件である「受容」と「表出」両面への支援を行うことで、ツール(PECS、タブレット)を使って自分の要求や気持ちを表出できるようになる。最終的には対象児のコミュニケーション(受容と表出両面)をタブレット1台で支えることを目標にしているが、今年度中の達成を目指すのではなく、シンボルの理解や PECS の習得など基礎となる力を身につけることを優先したい。

・実施期間

平成 27 年 6 月～平成 28 年 2 月

・実施者

活動支援:二村俊(共同研究者)

計画・観察・分析:井坪信(採択者)

・実施者と対象児の関係

二村:現クラス担任

井坪:対象児小学部在籍時クラス担任

【対象児の事前の状況】

[受容面]

活動ごとに写真などを見せて移動を促していた。スムーズに移動できていたのは、写真の理解というより日課の定着により移動できているようにとらえられた。支援者の声かけでも移動できているように見えたが実際は写真と同様、理解できているかどうかは不明だった。

[表出面]

発語はない。ツールとしては、給食時の「電子レンジ」のカードを使っていた(あたためてほしいの意)。

本研究に入る前にコミュニケーションの「表出」のみのアセスメントを行った。観察する際には以下のような観点で記録した。

時間	形態	内容	相手	意味		
11:56	<input checked="" type="checkbox"/> 動作 <input type="checkbox"/> 発声 <input type="checkbox"/> 絵・写真 <input type="checkbox"/> 言語	<input type="checkbox"/> クレーン <input type="checkbox"/> 具体物 <input type="checkbox"/> サイン <input type="checkbox"/> その他	<input type="checkbox"/> 要求 <input checked="" type="checkbox"/> 拒否 <input type="checkbox"/> コメント <input type="checkbox"/> 情報請求	<input type="checkbox"/> 注意喚起 <input type="checkbox"/> 感情表現 <input type="checkbox"/> 情報提供 <input type="checkbox"/> その他	担任	いない (お皿を差し出す動作)

例えば、給食では「ふりかけがほしい」と要求する場合、担任のウエストバッグを開けようとする、気持ちや要求が通じない時は頭をたたく、などの直接的な行動で表すことがほとんどだった。この結果をもとに、コミュニケーションツールの導入は、表出の機会が一番多かった給食の場面を採用した。

【活動内容と対象児の変化】

1 シンボルの理解(受容面)【6月～7月】

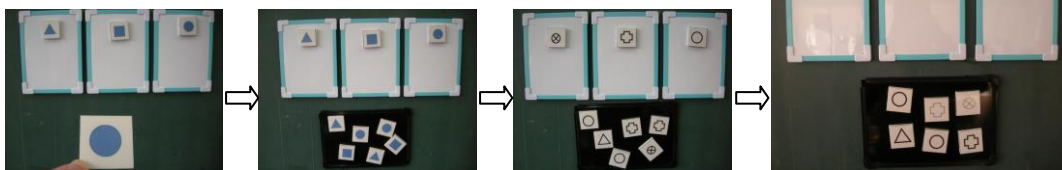
○ねらい:個別学習の時間(1日10分～20分)に、シンボルの理解につながる学習を行った。

①色の弁別



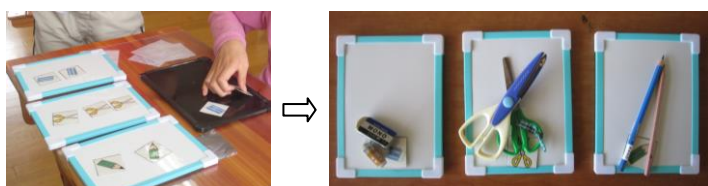
1枚のカードを弁別することから始め、次に複数のカードを弁別、最後に手持ちに余りがある中での弁別、という段階を踏んで学習した。

②形の弁別



こちらも1枚のカードから始め、複数のカード、塗りつぶした形から線画の弁別、線の太さを変えての弁別、と段階的に学習した。

③絵カードと実物のマッチング



絵カードと絵カードのマッチング、絵カードと実物をマッチングさせる学習を段階的に行った。

☆対象児の変化

④カレンダーの日付当番



③までの学習の評価も兼ねて、黒板の日付を貼る当番活動を行った。色を手がかりに貼ることからはじめ、最終的には数字と曜日(漢字)で弁別し貼れるようになった。

2 PECSによる表出(表出面)【8月～2月】

○ねらい:表出のツールとして、「PECS」を導入した。これまで表出手段を計画的に学習していなかった対象生にとって、好子(ごほうび)をきっかけにプロンプト(手助け)によってコミュニケーションの基礎を身につけられるPECSが適していると考えたからである。

また、PECSのガイドラインには、PECSからタブレットへの移行に関してはフェイズIVへの到達を持って行うことが推奨されている。

そこで、事前のアセスメントにより対象生の「表出」の機会が最も多かった給食の場面において、フェイズIVを目標に以下の①～④の内容でPECSによるコミュニケーションを導入した。

① フェイズⅠ（コミュニケーションの方法）

ほしいものの絵カードを教師に渡すことでそれが得られる、という基本的な方法を身につける。対象生の場合は、給食のときに要求する「ふりかけ」「電子レンジ(あたためてほしい)」「ココア」のカードから始めた。

② フェイズⅡ（距離と持続性）

離れた相手にカードを渡す。

③ フェイズⅢ（絵カードの弁別）

①からカードを増やし、その中から自分で必要なカードを選んで相手に渡す。(この段階では、動詞の「ください」は「文カード」(写真の黄色のプレート)に固定した)

④ フェイズⅣ（文構成）

「ください」カードもカード群の中から選択し、「○○」「ください」のふたつを文カードに貼り、相手に渡す。

☆対象児の事後の変化

PECS 導入前後での、対象生の表出方法と、使用した絵カード(語彙)の変化は以下のように変化した。この活動により、給食の場面では、絵カードで自分の要求を相手に伝えられることができ、意思疎通が取りやすくなった。フェイズごとに丁寧に支援することで、支援者が離れていたり、いつもと違う支援者であったりしても、同じように気持ち(自分の要求)を伝えられるようになった。

・導入前



表出手段

- ・動作…例:「ふりかけがほしい」→教師のウエストバッグを開ける
- ・写真…電子レンジ「あたためてほしい」

↓

・導入後
フェイズⅠ



表出手段

- ・動作
- ・PECS カード…電子レンジ「あたためてほしい」
ふりかけ「ふりかけください」
ココア「ココアください」

↓

・フェイズⅡ、Ⅲ



表出手段

- ・動作
- ・PECS カード…電子レンジ「あたためてほしい」
ふりかけ「ふりかけください」
ココア「ココアください」 パン「パンをください」
CD「CD を聴かせてください」

↓

・フェイズⅢ、Ⅳ



表出手段

- ・動作
- ・PECS カード…電子レンジ「あたためて」
ふりかけ「ふりかけ」 ココア「ココア」
パン「パン」 CD「CD(聴く)」
ください「○○をください(～してください)」

3 タブレットによる写真提示(受容面)【11月～2月】

○ねらい: 受容と表出、両面をタブレットが支えられるか、という本研究のねらいにそって、今まで活動場所への移動時に提示していた写真カードを、タブレットでの写真提示に変更した。



☆対象児の事後の変化

写真を見ると、確認するように画面を触る(タップ)する姿が見られたので、提示のアプリを「写真」から「DropTalk HD」に変更し、タップすると音声が出るようにした。(この支援により、PECS からタブレットへの移行において必要となる「シンボル」+「音声」の認識を強化できるのではないかと考えた)

4 PECS からタブレットへの移行(表出面)【1月～】

○ねらい: PECS のフェイズⅣ到達後、タブレットへの表出に移行した。使用場面は PECS 同様、給食とし、「DropTalk」を使用。PECS で使用したカードをそのままシンボルに登録するが、移行初期は、1シンボル=1つの要求(文章)となるように音声登録して(例: ふりかけのシンボル=「ふりかけをください」)、PECS からタブレット(DropTalk)への要求方法の変更に慣れるようにする。慣れたところで、2つのシンボルをタップする(例: ふりかけ→くださいのシンボル=「ふりかけをください」)方法に発展させる。

☆対象児の事後の変化(現在の状況)

PECS の表出方法に慣れていた対象生にとって、タブレットでの要求方法は戸惑いが見受けられる。特に、タブレット上のアイコンを連打してしまう姿が多く見られたため、1つずつのシンボルに登録する音声を長くすることとタップしたときにシンボルが大きくなる設定をして対応した。これにより、連打は少なくなったが、なくなってはいない。

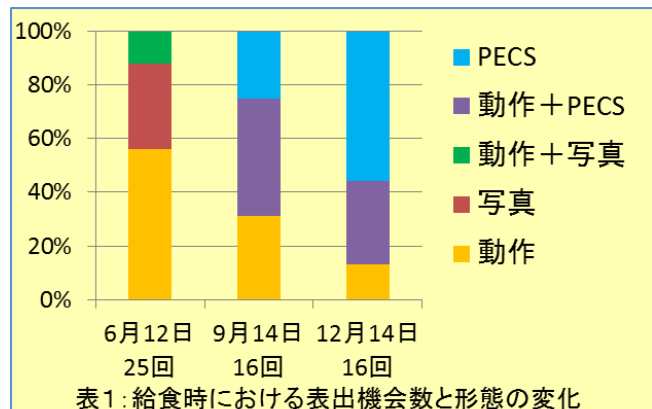
【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

・自分の意図が相手に「伝わる」手段があることがわかると、より「伝えよう」とその手段の選択機会を増やし、コミュニケーションの幅(意味や内容、相手)を広げることができる。

・エビデンス(具体的数値など)

表1はPECS導入前(6月)、導入後(9月:フェイズⅠ)、導入3か月後(12月:フェイズⅣ)の記録である。動作で直接的に伝えていた段階から伝わりやすいPECSにシフトしていったことが分かる。また、内容的にも例えば「ふりかけください」という要求の場面では、支援者のウエストバッグを開けようとする(動作)→ふりかけのカードを相手に渡す(PECS)→「ふりかけ」「ください」のカードを並べて相手に渡す(PECSの文構成)、とより伝わりやすい表出を選択するようになった。



・今後の方向(結果からの考察)

PECSでは、「文カード」を渡すという自分の動作と相手が自分の要求に応える動作自体が、自分の要求が伝わったという結果として目に見えて理解できたが、タブレットでは、シンボルをタップするだけで、相手と直接的な関わりがないため、自分の要求が相手に伝わっているのかが理解しづらいのではないかと。

また、PECSによる表出、フェイズ1～4への到達は給食場面でのみの評価である。上記のような理由から、タブレットへの移行が時期尚早であるとすれば、PECSによる表出を他の場面にも広げながら、使用できる(理解できる)カードを増やしたり、学校生活全般におけるフェイズ4の到達を目指したりすることが必要だったのかもしれない。

さらに、受容面では移動場面でのみ写真提示を行っているが、こちらも、スケジュールや活動内容の提示などに使用の幅を広げていくことでタブレット(DropTalk)のシンボル+音声に慣れる必要があるのかもしれない。

以上の点をふまえ、今後もタブレットありきではなく、対象生にとってどのツールが受容・表出しやすいのか、見極めながら必要感を優先して支援していきたい。